

ポーランド・ロマン主義考

——その一般的特徴・相貌，主要な性格について——

土谷直人

Polish Romanticism: Reconsideration

Tsuchiya Naoto

Abstract

In this rather small article, I would like to reconsider Polish Romanticism as a whole from the point of view of a foreign scholar. Unlike in Japan, Romanticism in Poland has a lot of interesting national characteristics, which, I would like to think, are still living in modern Polish minds.

Having been partitioned three times for more than a century, the Polish Nation gathered together all the more strongly for its loss, and the Poles focused their energy on their reunion. Accordingly, along with the passion and will for independence, the center of the Polish soul contains, first, a keen sense of nationalism, and second, mesianism (Poland=Christ). These kinds of sensibilities definitively determined the Polish national character, their literature and culture in the Age of Romanticism.

はじめに

『ロマン主義の情熱』（ロマンティックな熱，とも読める）という大著作をものした文芸評論家，研究者のマリア・ヤニオンは，その前書きを，次のように書き出した（7，23）。

「かなり一般的で，日常的なかつ本能的勘は，ポーランドにおける現代文化の開始をロマン主義に見つけだすよう命じている。——これはどうしてそうなのだろうか」

われわれも，このヤニオンのひそみに倣い，ポーランド精神の源流を求めて，この小論では，ロマン主義文化の主要な性格をスケッチしてみよう。近代的民族の成立期にあたり創造されたポーランド人の理想的人間像は，その後長く典型的なモデルとされたからである。普段ポーランド文化の細かな，瑣末な事象を研究し続けて25年を経過している筆者のこれはほんの「なか第74輯（2000）」

土谷直人

じきり」の試みである。なによりも木を見て森が見えなくなることをまず第一に恐れるからであり、またポーランド文学全般を改めて展望する新しい視角を獲得したいと熱望しているためである。

①ポーランド・ロマン主義の源流

ポーランド・ロマン主義の源流を尋ねてみると、——結論から言えば——それは、『5月3日憲法』に行きあたる。啓蒙主義者のフーゴ・コウォンタイ（1750-1812）は、『5月3日憲法』を、「死滅しつつある祖国の最後の意思、遺言」と呼んだ。この憲法——1791年に生まれた後、間もなくポーランド自体が滅亡してしまったが故に、ほとんど機能しなかったが——の精神を守り、育て、高く掲げていった者こそ、ロマン主義者たちであった。この憲法に関して基本的なことを、少し述べておくと、これは、アメリカ憲法、フランス憲法と並んで、18世紀に制定された最も古い近代的な憲法のひとつであり、実際はコウォンタイをはじめとする少数の人々によって制定されたにもかかわらず、決して上から押し付けられた憲法ではなく、ましてや欽定憲法ではなかった（27, 277）。そして、その内容には、ブルジョワ市民階級の権利や義務が明記されていた、という意味において、大変進歩的なものであったとされている。しかも、いかなる流血騒ぎも騒乱状態もなしに制定された（27, 480）。後にも述べるように、この憲法は、真の愛国主義のシンボルとなり、独立渴望へのシンボルとなったのである。

ミツキューヴィチ（1798-1855）はこれと同様な思想を次のように表現している。憲法は「過去にしっかりと根を張り、未来に発展すべき、生きた法」である。何故なら「この法は、一人の賢人、数人の学者の口から生まれ落ちたのではなく、無数の一般大衆の心から絞り出されたものであるからである。つまりただ単に紙の上にインクで書かれたのではなく、記憶の中に、幾世代の願望の中に今日まで生きているからである」。幾世代の願望とは何か。ミツキューヴィチは答えている。それは、「ポーランドのあらゆる抑圧者との戦い」、「自由への雄叫び」、そしてあらゆる社会階層の「市民権の充実・完成」である。こうして、ロマン主義の理想は、未来に生きることとなった。

ポーランド・ロマン主義の始まりと終わりを一応ここで確定しておこう。この言葉自体がポーランドに入ったのはどうやら1816年のようである（2, 11）。始まりは、ミツキューヴィチの『バラードとロマンス』が発表された1822年、終わったのは——大方の研究者によれば——、ロシアに対する大反乱が終わった1863-64年頃とされている。また細かな時期区分をする場合には、1822年——1830年——848年——1863（64）年というように区分している（12, 146）。ここにもロマン主義文化が、おおむね政治史の時代区分と一致していることがよく理解できるであろう。1830年以降は、ロマン主義の主流が亡命地西欧で流れており、また伏流ないしは傍流がロシア国内で流れていたといってもよいであろう。この時期彼らには自民族・自文化に対する「過度の防衛意識」が働いていたといってもよい。

いずれにせよ、『5月3日憲法』が政治的分野で遂行しようとしたものを、ロマン主義者たちは文学・文化の分野で遂行したのである。

②独立への意志——独立に賭ける

「政治的・法的存在」, 「国家としての外的独立と国民の内的自由」——これらが『5月3日憲法』の起草者たちを照らしていた目標であった。それらは達成されず, 国民の政治的・法的存在は全うされなかった。ポーランドが滅んだという事実に対して, 「いまだポーランドは滅びず」というスローガンが響き渡った。一体どこにポーランドがあるというのか。それは詩歌の中に, ポーランドのロマン主義の最初の作品の中にあるのである。つまり『ロマンチカ』の中に。ミツキューヴィチは次のように詠っている。

賢者の知恵や眼より

感情や信仰のほうが強く訴えるのだ (39, 112)

地図上にヴィビツキ (ポーランド国歌の作者, 1747-1822) はもはやポーランドを見ることはなかったが, しかし以前と同様に, 自分の心の中にそれを見て, 独立は獲得されるであろう, 「外国の力が奪いしものは, サーベルにて奪い返すだろう」と信じていた。ロマン主義には, もともとといわば男性主義原理みたいなものがあり, 巨大な情熱を備えた存在, 情熱を実現する意志の強さ, ないしはエネルギーの強さを所有した存在を賛美する傾向があるが (29, 63), この点でポーランド人のナポレオン崇拝は特筆に値する。実際, 彼はチルジット条約の後で, ワルシャワ公国を創設してくれたばかりか, 憲法さえ与えてくれたのであるから, このことも理解できる気がする。

この「情熱が奇蹟を生む」というロマン主義的信念は, ナポレオンの没落の後も, だんだんと愛国的詩歌の中で単に1831年ばかりではなく, 63年の軍歌や起床ラップでも鳴り響いていたのである。

われらが馬と腕力で——おおうそはつかぬ

悪魔の軍隊だって打ち破ろう!

こんなふうクラクフのヴァヴェル城下で軽騎兵たちは歌った (『ヤヌシュの歌』)。

こうした伝統は脈々と途切れることなく続き, 一月蜂起が敗北に終わった時も, 「最後のロマン主義詩人」のkolonel・ウイェイスキ (1823-97) は, 母なるポーランドが, 息子の死体を見て, 泣き崩れないようにと詠っていた。それは, 「遺骸と遺骸を取りまとめ……, 遺灰から (敵を殲滅する) 業火が巻き起こる」だろうからである。

このように独立への意志はロマン主義者の心の奥底に秘められており, 彼らの詩的ヴィジョンを照らし, 彼らの詩的創作に実に重要な役割を果たした。

祖国独立への思い——「汝の心あるところ, そこに宝あり」——はロマン主義詩人たちの心

土谷直人

を捉えて離さなかった。この故にこそ、ミツキューヴィチは、アッケルマンの草原（現在ウクライナ領、ベルゴロド付近）にて、耳をそばだて、リトワニアから声がしなかったか確かめたのであり、かつてポーランドの丘で見かけたコウノトリを地中海でも見かけた時に、スウォヴァツキは郷愁に胸を締めつけられたのだ。そしてまたクラシンスキは、自分の作品中のギリシア人が幾世紀からの眠りから覚めた時に、彼にポーランド魂とキリスト教魂を与え、北方へ赴くよう命じたのである（3, 302）。

③魂の改変——心の入れ替え，時代精神と国民精神

すべてのロマン主義者が武装蜂起を国の独立という目的に対する手段と考えたわけでもないし、それに呼びかけたわけでもない。大多数の者は、それがまだ時期尚早であると考えていた。ロマン主義詩の最高の理想は独立の達成である。したがって、意識的にせよ無意識的にせよ、詩的ヴィジョンに独自の形象と独自の情念的色彩を与える最高のアイデアは、ポーランド魂の建設、いやむしろ改変なのであった。

『5月3日憲法』が、国家を没落から救うために国家を改造しようと欲したのに対して、ロマン主義詩は、国民が国家の独立を達成できるように、社会の改造、国民の魂の改変を意図したのである。同一の源、理想・愛国的感情の共有性——ここに『憲法』とロマン主義詩の思想的な一貫性が流れている。

ロマン主義文学の広範な運動の主要傾向のひとつは、文学に「時代精神と国民・民族精神」を与えることであった。この民族性・国民性はまさにこの国の文学の顕著な特徴である。なぜなら、これには「民族の本質」、つまり民族の性格、民族の価値のテーマをめぐる論争が活発化したからである。この時代こそ、近代の民族の概念の形成期にあたっており、また当時大変に危機的状況にあった国民性を防衛、擁護すべき時期にあっていたからである。プロシア・オーストリア・ロシアに三分割されたポーランド人は、早晩国民としての一体性、アイデンティティを失ってしまうだろうと本気で考えざるを得なかったのである。

ポーランド・ロマン主義は、こうして本当に、H.カミエンスキ（1813-66）の言葉を借りれば「ポーランド民族の生涯の真実」の詩的な表現であり、またM.モフナツキ（1804-34）の願った「民族の良心」なのである。こうしてロマン主義作品の主人公たちは、最もしばしば、民族問題が伝記を決した人物たちであった。

ロマン主義哲学と美学に横溢している巨大な感情、「情熱」、エロティカの表象は、ポーランドの状況においては、情緒的で、熱烈な愛国主義の中に表現されている。ミツキューヴィチはパリのコレージュ・ド・フランスでの講義で次のように語っていた。「愛国主義は、ポーランド人の全精神的理性的教養の一種のドグマ（教説）である。彼らの文学全体がこのただ一語『祖国』という言葉から生まれ、成長し、開花したのであり、この一理念のさまざまな応用であり解釈なのである」（39, 115）。

感傷主義の後光にまだ覆われていた前期ロマン主義的主人公のグスタフが、不幸な国民への愛の名のもとにプロメテウスの、反逆者のコンラッドへと変身（『父祖の祭』）し、またエロテ

イカが愛国主義へと変貌することは、実にポーランド文学において象徴的事件であった。

④領土の保全，国家の範囲

ロマン主義時代の国家としてのポーランドの地域的概念は、現代の地域より東方寄りであり、かなり広がったことを記憶しておかなければならない。つまり現代のリトワニア、ベラルーシ、ロシアとウクライナの一部を含んでいたのである。したがってロマン主義作品の舞台は現代よりもよほど「地方色が豊か」であったことを認めなくてはならない。

実際、ザボロフスキ（1799-1828）はヴォーウィンを詠い、マルチェフスキ（1793-1826）とザレスキ（1802-86）はウクライナを歌い、スウォヴァツキ（1809-49）とゴスワフスキ（1802-34）はポドレを唱い、ミツキューヴィチはリトワニアを歌ったのである。

それは、16世紀にすでにピョートル・スカルガ（1536-1612）の言うように、これらの土地は「王冠をもって統一され、一体になって成長した」からであり、ヨーロッパ地図から消滅させられたポーランドを、領土の一体性を、その昔日の偉大さを少なくとも詩歌の中で保持しておきたかったからである。実際ロマン主義者たちは国民の敗北の瞬間さえ、ポーランドの地の一体性と偉大さを忘れてはいなかったのである。

かつてウルトラナショナルリスト（超国粹主義者）はミツキューヴィチが『パン・タデウシュ』（日本語訳、30）を、「おお、リトワニアよ、わが祖国よ！」と書き出したことで、彼を非難した。しかしそうした人々はその2年前に、ミツキューヴィチが『ポーランド国民の書』の中でこう書いていることを忘れていたのだ。「偉大な国民リトワニアはポーランドとあたかも夫婦のように、あたかもふたつの魂がひとつになったように結び付いたのである」。

すべてのロマン主義詩人たちが、ポーランドの地域を、ポーランド・リトワニア連合王国の範囲で考えていたことは明白である。旧領土復活への意志はかくも強固であった。「ポーランド人の祖国はその子等の従順な心臓が鼓動しているすべての土地で生きかつ活動しているのである」（39, 116）。

⑤国民・民族の一体性，民族主義，民衆性

ポーランド領土の保全、領土の統合のスローガンと並んで、『5月3日憲法』には「国民統合のイデー」が盛り込まれていた。これは啓蒙主義時代の学問と密接に結ばれ、そこから発展してきており、スターシツ（1755-1826）の言葉を借りると、「社会とは、その構成員が市民である、ひとつの道徳的存在である」。全階層をひとつの単一な国民に統合しようというのだ。しかしこの憲法は、幾世紀にもわたる歴史が引き裂いていた国民のあらゆる階層に完璧な市民権を与えはしなかった。シュラフタの保守性が他の階層の市民権獲得を阻んでいたのである。しかしながら一歩進んだ点もあって憲法はまた農民をも「法と政府の庇護の下に」置いたのである。

そしてロマン主義詩がこの国民の統合を推し進めた。それは反動や階級エゴイズムをやじり、

土谷直人

理性の欠如をおとしめ、普通の国民の生活、習慣、幸福や不幸を歌ったからである。文化的ナショナリズムと言って良いと思うが、とにかく自国民、自民族の特殊な文化的価値に目を向ける傾向というのは、この19世紀の前半に強く表れて、ロマン主義の大きな基底を成している。そしてこの時代にはまた、フォークロアがしだいに作家の目を引き、彼らはそうした伝承を創作の実践の中に取り入れていったのである。

ポーランド民族の特殊な文化的価値を主題としたものとしては次のような作品が挙げられる。

ミツキューヴィチ	『魚』その他のバラード
ク	『父祖の祭』(部分訳, 38, 23-64)
ク	『パン・タデウシュ』 (タデウシュとゾーシャのソプリツォーヴォでの会話)
スウォヴァツキ	『青春賛歌』
ゴシュチンスキ	民話, 民謡
レナルトーヴィッチ	民謡
クラシェフスキ	民話

一般的に言えば、音楽に関しては、ロマン主義の中に民族もしくは民俗主義的なものが、非常に多く存在する。ショパン(1810-49)の、ノクターンやエチュードは別にして、マズルカやバラードなどは、この意味で、ナショナリストな背景を持つ民俗的な性格を多分に持っていると言って良いであろう。ミツキューヴィチのバラードなどもショパンによって作曲されている。

また、この時期には単に村人、農夫ばかりではなく、町人階級も同様に詩歌や小説の題材となったことを忘れてはならない。例として次のものがある。

ポル	『靴屋キリンスキの話』(キリンスキは独立運動の英雄)
ロマノフスキ	『ソチの少女』
コジェニョフスキ	『親類』

ポーランド・ロマン主義の最も顕著な性格のひとつに、その民俗的・民衆的性格がある。西欧ロマン主義と共通な哲学的土台を持ちながら、このロマン主義のその性格は、フォークロアの源泉に富んでいる。ポーランド文学はどのような方向に進むべきかという質問に対して、K. プロジンスキ(1791-1835)は、わが国の文学は、異国人のまね事、エコーになってはならず、「われらの故郷がわれらを導く所へ」行くべきだと、答えている(5, 248)。

現代ポーランドと違う、このフォークロアの源泉の範囲の広さを概観してみよう。古いポーランド「共和国」の地域は、人類学的観点から非常に多岐にわたっていたのである。主として中流シュラフタ階層からやって来たロマン主義詩人たちの多くの「子供時代の国」は、村であり、それは、リトワニアの、ベラルーシの、ヴォーウインの、ポドレの、ウクライナの、マゾフシエの、そしてヴェルコポルスカの村々であった。——以上列举したうち、大部分が現在ポ

ーランド領ではない。

子供時代の思い出、若い作家・詩人たちのフォークロアの散策やその収集の愛好——これらは「父祖たちの」エリート文化に対する反抗でもあった——が詩歌となって結実し、それらの詩歌に地域的色彩を与え、そのことは当時の評論家たちでさえ意義を強調し、価値あるものと認めたのである。

ポーランド・ロマン主義詩人がフォークロアに興味を抱き、いやそれどころか魅了されていたのは、当時流行の兆しを見せたスラヴ学とも結び付いていた。原始スラヴ人の文化の跡が民衆文化の中に探求されたのである。典型的な作品例は以下のごとくである。

「典型的民衆性」	ミツキューヴィチの『バラードとロマンス』
「ウクライナ性」	ザレスキ、マルチュェフスキ、ゴシュチンスキ
「スラヴ・フォークロア」	ガリーツィアのジェヴォンチック
「御伽噺性」	スウォヴァツキの『バラディーナ』
「民衆的インスピレーション」	レナルトーヴィッチの詩
「マゾフシェ人への熱愛」	40年代ワルシャワ青春文学
「ヴェルコポルスカ・フォークロア」	ベルヴィンスキの作品
「クラクフ・フォークロア」	ヴァシレフスキの詩
「ベラルーシ・フォークロア」	スイロコムラの詩
「民衆調、民謡節をおびた詩的歌詞」	多数

これらがロマン主義固有の国民・民族の理想化であり、その詩的表現なのである。しかし時事社会評論によって、村の現実が知られるようになると、百姓・農民問題はもともと焦眉の社会・政治問題として日程に上り、文学の民族・民衆性の問題を、この時代、かなり広範囲に広げつつあったのである。

ロマン主義詩歌は、しばしば無慈悲なほどあからさまに、農民の底知れぬ不幸、ふつふつとたぎる反逆精神を表現し、「赤い血の海による」革命の幻影で人々を威圧した。ロマン主義は、百姓・農民を文学作品の主人公とした。たとえば、農民蜂起コリーフシチナの指導者I.ホンタなどがその例である（34, 13-17）。

国民・民族史において、民衆の伝統に高い評価を与えたのは、ミツキューヴィチの作品『コンラッド・ヴァレンロッド』の中の「郡の歌、民衆歌」の称賛であった。

おお郡の歌よ、お前は民族の教会の
思い出を護るために立っているのだ
天使の翼と声とを持って

ミツキューヴィチのパリでの『スラヴ文学講義』は、文化における民衆の作品の価値を比類なく高めた。これは、ミツキューヴィチによる「民衆芸術・民芸」の発見とも呼ぶことができ

土谷直人

よう。またノルヴィッド (1821-83) の詩的芸術論『プロメティディオン』は、民衆・民俗作品と国民・民族作品との相関関係に関する深い思索に貫かれている。

ロマン主義の詩人たちのエリート主義に反対する姿勢の中にも、特別な「民衆性」に対する思い入れがあったと言って良いかもしれない。こうしてミツキューヴィチは、彼の詩が「藁屋根のもとで散歩する」、つまり民衆に読まれることを望んだし、スイロコムラ (1823-62) の民衆にとっての親しみ易い文体で書かれたおしゃべりや、クラシェフスキ (1812-87) の平易な書き方が人気をおさめたのである。

同様に、詩人たちの自然に対する関係が特別な色合いを持っている。まさにこの時期に地方色豊かな景色が、人間の性格と居住地との関係が、フォークロアと自然環境の共生が発見されたのである。自然の叙情詩はしばしば理想化された最も身近な故国・故郷へのノスタルジーで貫かれている。たとえば異国に住むことを永久に運命づけられたスウォヴァツキは「イクファ川の銀波が流れるところ」を歌い、地中海の船の上でも、エジプトのピラミッドの頂上にも、故郷を思ったのである (40, 63-64)。

村はその魅力と自由の感情を持って、自由の圧迫がより感じられた都市と対比された。道徳的な命令として自国を知るところを余儀なくされた詩人たちは、「絵のように美しい旅」を、「国民的巡礼」を、「おらが国旅行」を行なった。父祖伝来の土地に対する情緒的關係は、愛国主義の一要素となった。このような作品の例には、詩的にポーランドの地理を歌うW.ボル (1807-72) の『わが土地の歌』があり、またスイロコムラは『リトワニア・ジムチ旅日記』を書いている。シフィテシ湖やゴブウォ湖、ヴィリア、ドニエプルやヴィスワ川が詩に取り上げられた。詩はまたタトラ山脈も発見したのである。

ポーランド・ロマン主義にとって典型的なもうひとつの現象について述べておかねばならない。それは外国の検閲がある条件の下で国内では詩歌が発展せざるを得なかったということである。このため詩人たちは、自分の主人公たちにさまざまな歴史的衣装を着せ、仮面をつけさせ、暗示に富む、お互いにわかるメタファ、皆にわかるシンボルを使い、その下に民族的な、自由をめざす内容を隠さざるを得なかったのである。たとえば「コンフェデラートカ」という「連盟員の帽子」は、「自由を求める」シンボルとなった。近隣三国のテロは厳しかったので、多くのテキストは手稿のまま、まわし読みされた (34, 24)。

叙情詩は、歌となって「敵」の目をくらませた。歌に託された叙情詩は世代から世代へと非常な人気を博した。この時代の歌は国民の愛唱歌の中に取り入れられ、末長く歌い続けられることとなった。

⑥国民のための個人の犠牲的精神

ポーランド国民統合のイデー、「社会とは、その構成員が市民である、ひとつの道徳的存在である」というスターシツの説から、啓蒙主義哲学は、次のような論理的結論を導き出した。つまり、「市民たることは、自己否定すること、すなわち自分の意志と自分の固有の力をすべての同僚・仲間に捧げなければならないということである」。

この啓蒙時代のスローガンが『憲法』の規約にこう響いている。「自分の生涯・生活よりも、自己の個人的な幸福よりも——政治的存在，民族の外的独立と内的自由をより価値あるものと評価しなければならない」。これこそポーランド・ロマン主義詩歌の最も輝かしい性格を最も見事に言いあてている言葉である。この自己犠牲こそ同時に最高度の道徳的美点ではないであろうか。

ポーランド・ロマン主義は、概略的に言うと、現存世界との不調和，不協和音（これらがもたらす狂気の問題を扱ったものには、文献19がある）、異議申し立て，反逆の表現であり、愛他主義的態度，国民，民族，人民の問題に積極的に参加することを賛美することであった。さまざまに解釈されてはいたのだが、「行為」の定言命題が、普遍的に、民俗哲学にも、詩歌にも、社会評論にも謳われていたのである。当面の問題に参加せよと呼びかけながら、ポーランド・ロマン主義は、個人的な人生の目的を放棄せよ、己が任務を遂行せよとの命令表現であった。この文学は、忍耐と行動，闘争と犠牲のヒロイズムを賛美した。スウォヴァツキのよく知られた命令表現に次のようにあるごとく、「もし必要とあらば、神によって溝に投げられた石のように、死に向かって次々と行かねばならない」という、自分自身の生活まで含め例外なく犠牲を要求したのだ。愛と死が接近した。狂信的な自由愛好と愛国主義が合流した。行動への刺激として、敵に対する憎悪にかられた絶望的な復讐のモチーフが極めてしばしば取り上げられている。『コンラッド・ヴァレンロッド』（ミツキューヴィチ），『父祖の祭』（ミツキューヴィチ），『コルディアン』（スウォヴァツキ），『イリディオーン』（クラシンスキ）では、この音調が奏でられ、そしてロマン主義第二世代のワルシャワの詩人たちは、激情のすべてを持ってそれを受け入れたのである。シベリアに流刑にされた彼らは、「絶望のあまり半狂乱になった」のである。

また『青春賛歌』（スウォヴァツキ）から『コンラッド・ヴァレンロッド』や『コルディアン』，『イリディオーン』や『アンヘリ』（スウォヴァツキ），それに『パン・タデウシュ』（ミツキューヴィチ）や『精霊王』（スウォヴァツキ）にいたるまで、すべての、ほとんど最も重要で最も美しい作品の中に自己犠牲のスローガンが、個人によって自己のいのちと個人の幸福を国民の善の祭壇へと供することが高らかに謳われている。しかもそれが彼らの作品の主調音であり、それらの指導的理念なのである。これらの作品の主人公たちが祖国を高みに引き上げ、幸福にいたる手段は、しばしば空想的である。たとえばコンラッド・ヴァレンロッドは、復讐をとげる相手国の軍隊の司令官となって、軍隊を壊滅状態に導き、結果的に祖国を救い、コルディアンはさまざまな人生経験を経た後で、改心し、当時ポーランド国王となったロシア皇帝を暗殺することになったが、暗殺実行直前にめまいを起こし倒れ、捕らえられる。皆、自分の身を犠牲にしながら、祖国につかえ、そしてその報酬は求めないのである。

個人的な犠牲を払っても祖国のために尽くそうという態度は、ときに極端な形を取って多数の陰謀家を生み出した。ロマン主義的作品は、この種のエピソードにことかかない。現代風に言えばテロリストといった一群の人々は多くの作品に取り上げられている。たとえば、S.ゴシユチンスキ（1801-76）の『フマニの叙情詩』，S.ガルチンスキ（1805-33）の劇詩『ヴァツワフの物語』，M.ホチコ（1800-79）の戯曲『1833年のポーランド遠征十景』，J.スウォヴァツキの

土谷直人

『コルディアン』, K.ノルヴィッドの『解放された女』などがある(8, 355)。

19世紀30年代, 40年代はまた革命に明け暮れた時代であった。フランス革命の余波, フランス二月革命の余波はヨーロッパ中をかけ巡り, 農民・労働者の蜂起・反乱を数多く生み出した。ポーランドのロマン主義者もこれらの事件に対して無関心ではあり得ず, さまざまな作品にそれらの事件の反映がみられる。

ここでは最も重要な作品をふたつだけ取り上げておく。父がナポレオン軍の将軍であったZ.クラシンスキは大方予想されるように, 革命に対して否定的であり, 『非神曲』の最後の場面では, 革命派の勝利のあかつきに, 首領のパンクラーツィ(「全能の主」くらの名)は, なんとキリストの幻を見て終わる。キリスト教のモラルを超えるものを, 革命派は持ち得ないと言うことであろうか。

それに反し, スウォヴァツキは農民反乱に肯定的である。歴史には混乱も不条理もない。「炎」を持っての革命は, 「夜明け」へと導く——スウォヴァツキの美学と倫理の神秘的な言葉で描かれた『サロメアの銀の夢』の解釈はこんな具合である。「人民の歴史」——彼自身の命名による——は神聖であり, この歴史は, あらゆるものの意味と意義を見いだすことを可能にする, より高い出発点に向かって伝達する指標に満ちている, というのだ(8, 127)。

⑦過去への愛, 歴史主義

人がどこからやって来たのか, また己の民族の出自を確かめたいと思うのは, 人間本来の自然な感情であろう。そして祖国愛は過去への愛へと向かう。

われは国民全体を愛す! ——民族のあらゆる
過去と未来の世代を肩に抱きながら

と, ミツキューヴィチは書いている。まことに伝統への敬意なくして, 民族の過去の世代への愛情なくして, 彼らの世代とのつながりの感情なくして愛国主義はあり得ない。『憲法』の第二条は次のように始まっている。「政府の基礎として, われらが父祖たちの思い出を尊敬しながら……」, ヤギェウォー一族やカジミェシュ大王の発した法令をここに招集する。いやそれどころか, この『憲法』全文それ自体, コウォンタイの命名によれば, 「穏やかな革命」なのである。つまり憲法は過去と断絶せず, いや, その反対に, 過去の基礎に則って, 未来は建設されるのである。

こうして伝統崇拜, 過去への敬意と愛情がロマン主義詩歌の秀れた性格となった。『パン・タデウシュ』には, 単に最近の伝統だけでなく, 遠い過去も生き生きと生彩を放っている。ここには, ほとんどすべての民族の重要な思い出が生きているのである。

スウォヴァツキは, 「がさつな骸骨」には足蹴りを食らわせているが, しかし過去の魔力には抗し得ず, こう歌っている。

・・・ありふれた恋, ポーランドの家々

ごくごくいう喉、髭、犬、軍帽、それに
とりわけ誠実無比な、ポーランド魂

マルチェフスキは、想像力と心で騎士道華やかかなりし過去に飛び立って、19世紀の灰色の現在と対比させる。

(現代とは)・・・広大な
野原に響くはまったくの沈黙
陽気なシュラフタも、騎士の声もせぬ
ただ風だけが陰気にそよぐ、穂をゆらせながら
墓からは草葉の陰から溜め息とうめき声
地下には眠る、過去の栄光の花輪に包まれて

この時代には、ゴシュチンスキの『風雲カニユフ城』などの歴史物語も生まれている。

このような事例に見られるように、ポーランド・ロマン主義の顕著な特性として、さまざまな色彩を持って表れる歴史主義を挙げなければならない。生き生きとした想像力を喚起する歴史の発見、過去による現在の状況規定性の意識、文化的伝統の重みの感情は、ヨーロッパ・ロマン主義の実に本質的な問題であった。しかし、道徳的、文化的な復興の頂点にあった時に政治的な独立を失った国民、過去の栄光とつい最近の独立のための戦いの記憶で生きている国民、この独立するという理念を決して放棄したことのない国民——この国民・民族にとっては、歴史主義は特別な価値を持っていた、と言えよう。

この歴史主義はまた同様に当時の歴史記述、資料研究、過去の歴史遺産への関心にも姿を現した。またこれと不可分に伝統の問題が浮上した。現在をどの過去と結び付けるか、伝統をどこから汲み上げるかという問題に関しては、普通、ヨーロッパ・ロマン主義は中世を主として選んだのであるが、ポーランドはさまざまな時代を選んだ。

詩的想像力にはポーランド史の有史以前、太古の時代の研究成果が、大いに貢献した。この点でかなりの影響を与えたのがヨアヒム・レーヴェル(1786-1864)の執筆活動である。また戦争と反乱の激動期であった17世紀——ポーランド史では『大洪水の時代』という——が人々の想像力を誘い、同様にいまだ人々の習慣の中にある18世紀もイマジネーションを喚起した。

ポーランド騎士階級の道徳規範(ポーランド版武士道)は、数多くのロマン主義作品で称賛された。保守派の地主貴族たちは、それをマグナートつまり大貴族賛美に祭り上げた。ロマン派世代をとりわけ感激させたのは、最初に外国の強国に対して抗議を申し立てたということで理想化されたバル連盟と連盟員たちであった。

またつい最近の歴史的事件も詩歌に詠い込まれた。ロマン主義詩は、国民的英雄伝説を創造した。こうして英雄になった自由の殉教者たちには、次のような人々がいる。

T. コシチューシュコ(1746-1817)

土谷直人

- R. キリンスキ (1760-1819)
- J. ポニャトフスキ (1763-1813)
- E. プラーテル (1806-31)
- J. オルドン (-1886)
- J. ベム (1794-1850)
- A. ザヴィーシャ (1808-33)

文学的に優れており、語り物としても優れている歴史は、一般民衆教育の手段となった。公教育では、分割三国の言語・歴史教育を施されたから、このことには、多大な意義がある。

ポーランド・ロマン主義における歴史主義はしばしば詩的言語で表現された歴史哲学の姿をとった。何故なら、詩歌の開花と時を同じくして、哲学の急激な発展が見られ、いわゆる「国民・民族哲学」と呼ばれる体系創設の多くの試みを実らせたからである。

国民の問題性に思想家の情緒的参加をしたことから生まれた歴史哲学は、これらの哲学体系の最も本質的な部分となった。ヨーロッパの思想家やポーランドの彼らのパトロンの下で、ポーランドのロマン主義作家たちは、民族の過去の研究から、ある法則性の存在、歴史における神の介入（干渉）を導き出した。こうした確信に基づき未来のヴィジョンが計画された。彼らは進歩に対する信仰を抱き、より良い未来を信じたが、しかしその実現は歴史の激動・大変動の中で行なわざるを得なかった。

こうして詩には過去と未来、伝統・保守と進歩、歴史と予言が入り混じった。詩人たちには「明日の民族の予言者」の役割が与えられたのである。この予言者の最たるものが、詩聖ミツキューヴィチであり、またトヴァインスキ (1799-1878) であったのである。

このような歴史のジンテーゼ、総合をめざした試みの具体例には、スウォヴァツキの『精霊のゲネーゼス』と『精霊王』がある。詩人は原始の時代から人類の最終目的——精霊の解放にいたるまでの宇宙的なヴィジョンを紡いだ。直接的な影響関係はないと思われるが、愛による世界総合の壮大な宇宙神話を描いたノヴァーリス (1772-1801) の『ハインリヒ・フォン・オプターディングゲン』に多少とも似ているかもしれない (20, 49-82)。

⑧メシアニズム、救世主義

ポーランド・ロマン主義の特徴のひとつにメシア主義がある。イギリス・フランス・ドイツ・ロシアなどのロマン主義にはあまり見受けられない、際立った特徴のひとつである。これも国家が滅亡したこととポーランド人の宗教的性格に大いに関係するであろう。

ポーランドは「選ばれた民族・国民」であり、この国民は地上に神の国を実現しなければならないと人々は考えた。そして不幸なことであるがうまい具合に「祖国が墓場に入れられている」国民、特別苦しい試練を与えられている国民、いやそれどころか更に分散させられている国民にとっては、楽観論を基調とするメシアニズム的思想は、すこぶる好都合であった。この救世主義は、歴史哲学の合理主義的省察から導かれたものであろうと、極端な非哲学的非合理

主義から導かれたものであろうと、人類の最終目標の実現という特別な使命をポーランド国民に与えたのである。ポーランド人は己が民族のイメージをキリストのイメージと重ね合わせたのである（10, 40-46）。

メシア主義のイデオロギーは詩人たちのイデオロギーとなった。このイデオロギーは単に哲学論文になって記述されただけでなく、詩人が勝ち得た重い権威に裏付けられた、表現と暗示に富む詩的言語で表明されたのである。このような例の最大の物としてミツキューヴィチの予言的言葉によって語られたパリのコレージュ・ド・フランスでの講演がある。彼は、神が歴史の運命を定めると、心の底から信じていたに違いない。『スラヴ文学講義』の根底を成す歴史哲学には、この神の意志の実現がみてとれる。

ポーランドの詩的メシアニズムは、世界変革におけるポーランドの指導的役割と救世主的使命を国民に示し苦しみ悩む国民によりよき明日への奇蹟的樂觀的信仰をもたらしたが、民族的排外主義を持ち合わせることはなかった。いやむしろ『講義』では、しばしば「スラヴ民族の統合」を説いている（39, 113-114）。

ポーランド・メシアニズムには二方向あり、ひとつは過去へと向かい、もうひとつは未来志向である。前節で、「過去への愛」を取り扱ったが、過去の墓場から立ち上がり、ロマン主義の詩歌で生き返ったものすべてが蘇生し、とりわけ栄光の光背に包まれるに値するであろうか。

喧騒に包まれたシュラフタの家屋敷、宴会、小会議それに激論、つかみ合い——すべてこれらは虹の輝きとなって過ぎ去り、魅力的でありながら、どこかもの悲しい調べとなってうち震えている。

ミツキューヴィチはパリの『スラヴ文学講義』で、ポーランドの古い憲法、あの17世紀に結晶した古い憲法を理想化した。つまり選挙王制ばかりではなく、リベルム・ヴェト（シュラフタの拒否権）をも。そうしてミツキューヴィチは、この憲法こそ来るべき将来の憲法であり、理想的な憲法で、国家による強制ではなく、自由意思に基づいたこのような憲法こそ、市民に対する天からの最大の贈り物であり、社会の最大の本質的性格である真の自由を保証する、と信じていた。

これに対してスウォヴァツキは決して無条件的にポーランドの過去を理想化したことはない。政治的ではなく、ただ社会的な罪がポーランドの過去に重くのしかかっていたと、スウォヴァツキは言う。「われわれは自由を欲しましたが、しかし自分たち自身悪の囚われ人だったのです。自由と幸福を願ったのですが、われらが兄弟の農民・百姓たちは迫害と貧困にとどめられたのです」。そしてこれらの罪のために神がポーランドに没落という罰を与えた。しかしこの没落は同時に、将来のポーランドにとって、神の恩寵、天の恵みなのである。ダンテの『神曲』のポーランド版たる（ダンテのような、コメンテーターを必要とする、と作者は書いた。23, 183）スウォヴァツキの『アンヘリ』の中で、主人公のアンヘリは、シベリアという煉獄・地獄を通して、ポーランドの復活へと向かう様が暗示されている。

詩人クラシンスキのイデオロギーもまた非常によく似ている。彼は、実際、リベルム・ヴェトも、「連合組織」も、自由選挙制も賛美することはなかった。彼は古いポーランドの罪や欠点、短所について率直に発言し、自分の哲学的著作では、それらに名前さえつけている。「見

土谷直人

せかけの軽薄」, 「天真爛漫な天使のごとき明日に対する配慮の欠如」, 「事件の意味を考えることの欠如, 事件の無反省」, 危険をも省みず, ただ「最高の利益」だけを考へて締結した同盟への前代未聞の無関心等々。これらの欠点がポーランドを没落に導いたのである。

これらがポーランドの未来に花咲くための原罪であり, フェニックスとなって復活するための資料であった。ポーランドは救済されるためには一度地獄に落ちねばならない。

⑨未来を志向するメシアニズム

すべての人々が, ポーランドの幸福な未来のための絶対的条件として, 精神の入れ替え, 魂の改変のスローガンを声高に唱えた。しかし, そのことを最初に唱えたミツキューヴィチは①ただ魂を拡大し改良することだけではポーランドに政治的存在, すなわち独立をもたらすことではないということ, また②ポーランドの蘇生は全ヨーロッパ的戦争の結果としてのみ起こるであろう, と理解していた。「ポーランド問題は, 何かある全ヨーロッパ的政治的嵐の声となった時のみ, 世界の法廷の前に再び提起されるであろう」。

このために, 彼は『ポーランド国民巡礼の書』で巡礼者たち全員に, こうした戦争が起きることを祈れと命じたのであり, 実際, 自分もそのために奔走したのである。彼は露土戦争中にポーランド軍団を率い, トルコ側について戦おうとしたところで, 1855年に客死した。このような点にも, 彼の反ロシア的態度が色濃く見受けられる。

スウォヴァツキもまた国民に魂の拡大と改良を呼びかけた。しかもそれは自分の道徳的宗教的変容の前なのである。モラルの清潔さ, 「がさつな骸骨」の牢獄(ポーランドの比喩)から「天使の魂」の解放なくしては, ポーランドの未来は想像することもできなかったのである。天使性(anielstwo)を彼は奇蹟を起こす力と見做し, 敵に対する盾と見做したのである。

クラシンスキの場合はどうであろうか。ミツキューヴィチやスウォヴァツキと違って, 彼はポーランドのメシア主義思想を極端な結論に導いた。彼は, ポーランドを「キリストの民」と見做し, 単に三国分割以前の歴史の中にもキリスト的性格を認めただけではなく, ポーランド国民は自己の政治的な死滅の後で, 将来諸民族のキリスト, すなわち神の王国の建設者と成れるであろうし, 成らなければならない, という教えまで説いたのである。彼の教えはまだ続く。歴史の十字架上で苦しんだまさにわれらが国民性を通じて, ポーランド国民は人類精神の良心の中に現れるであろう, そして政治性は宗教性へと変容しなければならない。諸民族のキリストになるということは, キリストのように聖なる者になり, キリストのように忍耐し, しかるべき時にはキリストのように苦痛を一手に引き受けるということである。クラシンスキはこのことを『愛の賛歌』の中ではっきりと歌っている(3, 317)。

彼らの未来志向のメシアニズムは結局のところ, ミツキューヴィチの予言のように, 全ヨーロッパ的戦争, つまり第一次世界大戦の結果として, ポーランドが独立を果たすという形で, かろうじて一応の達成をみた。

⑩ロマン主義の傑作

美学・芸術学の見地から、ポーランド・ロマン主義の達成した、ヨーロッパ文学の水準に達した作品を取り上げ、簡潔にまとめてみよう。

この時期のいかなる作品とも比較できない比類なき傑作としては、『パン・タデウシュ』（「Mrタデウシュ、もしくはタデウシュ君」くらいの意味）がある。この作品は、ロマン主義の方法で、あらゆるジャンルの総合がなされている、といわれている。この作品については、参考文献（30）に詳細を譲りたいと思う。

次にマルチェフスキの『マリア』の詩的散文は、人間存在の初期ロマン主義的悲観哲学の伝達において、極めて高い芸術的水準を達成した。さらに脱線叙事詩の名人芸には、——ロマンチックな皮肉も随所に込められ、ちりばめられているが——スウォヴァツキの『ベニョフスキ』がある（34, 21-26）。

ポーランド・ロマン主義はまた他国、他所では知られていないジャンルを創造した。シュラフタの小話やアネクドット、それに民衆のおしゃべりから「おしゃべりジャンル」を創り出したのである。現代ポーランド人のおしゃべり好きも案外この辺にその源流があると思うと、微笑ましい。このジャンルの末裔たる、カヴァウヤドフチップは、社会主義時代いよいよ輝きを増したほどである。

しかしこの時代、最高度に発展したのは、劇詩である。作劇コンセプトからして非常に優れた作品には、以下のものがある。まず第一に、民族の形而上学的ドラマを伴った『父祖の祭第三部』（部分訳が、筆者土谷によりなされている。参考文献38参照）。

また『コルディアン』は、素晴らしい劇的、劇場の工夫を持っており（参考文献36参照）、——これにはフランス演劇のその方面での発展の影響があったであろう——さらに『非神曲』は、当時の革命と詩歌という時代の問題性を取り扱い、それに総合的な表現を与えている。『バラディーナ』はシェークスピア風の精神で寓話のパロディーとして独創的であり、秀逸である（25, 414-415）。『リラ・ヴェネーダ』は、ロマン主義精神にあふれた神話の詩的パラフレーズ的作品である。ポーランドの先住民のヴェネード人を「天使の魂を持った人々」と名付け、レヒット人を貴族風悪徳を持った人々と規定しているのは、なかなか面白い（28, 237）。18世紀の政治的事件に題材を取った『マーレック神父』と『サロメアの銀の夢』の超現実的バロック性——これらがポーランド・ロマン主義の劇部門の優れた業績である（28, 242）。

『精霊王』で、スピリチュアリズムの哲学と幻影状態を、純粹詩歌に翻訳することを敢行したスウォヴァツキも、ヨーロッパ・ロマン主義において特別な現象である。この神秘主義時代の彼の叙情詩は、ノヴァーリスの作品と並んで、神秘的なひらめき状態で得られる詩的知覚と幻影の最も純粹な詩的伝達である。『シヨパンのフォルテピアノ』を書いたノルヴィッドは、この作品において、ポーランド・ロマン主義叙情詩の気品ある体面を保っている。ノルヴィッドの詩作品は、晩期になって「ポーランド詩の規範」となり、ロマン主義のイデオロギーや詩学の多くを克服しつつも、この時代の文化から生まれ、その補遺となり、そのうえヨーロッパ

土谷直人

におけるロマン主義時代の詩的業績に重要な貢献をした。

文学作品ではないが、ロマン主義の傑作として、クラシンスキの愛人、友人、知人に宛てた大量の手紙と、スウォヴァツキの手紙を挙げておかなければならない。ロシア文学におけるトゥルゲーネフの手紙と同様、彼らの手紙は、やや個人的なものではあるが、この時代の雰囲気をよく伝えている。この時代に関して言えば、日本語で読めるものとして、ショパンやジョルジュ・サンドの書簡が有名であるが、彼らの手紙ももっと注目されてよい。スウォヴァツキの大層なマザコン振りも白日の下に暴露されてしまうのであるが。

⑪ロマン主義の価値

新しいものが初めてお目見えする時は、いつも決まって世の正統派から非難を受けるものである。ロマン主義も、ポーランドに姿を表した頃には、当時の最高度の知識人、ヴィルノ大学のヤン・シニャデツキ（1756-1830）からこう非難されたものである。ロマン主義なるものは、反逆と疫病の一派であり、教育と言語の純正のために危険である、と。ヨーロッパでは、これこそ今世紀のはやり病である、と嘆いたゲーテのような者もいたのである。

この小論では、主として、理念・思想的な側面から、ロマン主義を検討してきており、その他の側面に触れることは少なかった。最後にここでは、簡単にこの時代と文化の総まとめをしておきたい。

ポーランド・ロマン主義は他のヨーロッパのロマン主義とは、その発生および発展の特殊な歴史的偶然またその明瞭な民族的性格により大いに性格を異にしている。単に文学だけではなく、またこの時代のイデオロギーにおいても多くの特徴に富んでいる。ロマン主義はこの民族の文化において例外的な意味を持っている。例外的な意味とは何か。

ポーランドの地へのロマン主義の導入は、まさに新しい民族文学のモデルを探求している時と、また秘密の独立運動の形成期とにあっていた。これはロマン主義が二つの課題①美学的革新という課題、②最も本質的な民族の独立という課題を背負い込むことを意味した。こうして、文芸評論家のS.ブジョゾフスキ（1878-1911）は次のように書いている。「ポーランド・ロマン主義は、何かあるインド・ヨーロッパ諸語の文化・文学潮流の反映でも反響でもない……ポーランド・ロマン主義は、過ぎにし19世紀の初頭にポーランド社会の魂に表れ、去来した変化、運動、変容、転生の発現であった。ロマン主義を理解することは、この変化、この運動、この変容、この転生を理解することなのである」（12, 144）。

ポーランド・ロマン主義の発展はまたヨーロッパ・ロマン主義の最後の段階にあたり、当時の不安、自由への希求を表現し、1848年の革命を予告する指標となった。ロマン主義文学のこの素早い発展と開花は民族の分断という条件の下で進行した。こうして公共の問題に最も深くかかわったこの国の知的・芸術的エリートは、すでにしばしば述べたように、主としてフランスを中心とする西欧各国に亡命者として滞在していたか、あるいはロシア帝国のさまざまな地方に流刑され、移動させられて積極的な活動を展開していた。

ロマン主義文学は、こうして精神の奥底から民族をつなぎ止める力、求心力となり、全民族

を対象とする文化を形成したのである。国の文明全体が崩壊し、生活の他の分野での発展にブレーキがかかり、教育・高等教育システムが清算された状況の下で、文学には少しばかり特別の例外的な役割、いわゆる教育の代用の役割が与えられた。そしてまた印刷・複写技術の発展、書籍業の強力な推進、秘密の配達ルートの形成等などが、少なからず読者層を拡大するのに役立った。

クラシェフスキのような作家を例外として、ロマン主義時代とは詩の時代であった。

詩の威力、詩人の特質、権限、特性に対する信念は、ロマン主義のさまざまな宣言文に発表されているが、上述のようなポーランドの条件のもとでは、単なる美学的宣言には終わらなかった。詩人は、偉大なものも、二、三流のものも同様に、詩的言語の力への信仰に裏打ちされ、理念的指導者をめざし、「魂の主宰者」たることを願った。偉大な道徳的価値を要求され、言行一致を求められた詩人は、最高の権威となったのである。こうして、人間の生存と民族の生存の最も本質的な問題はまず第一に詩的言語によって語られたのである。日本文化には、これほど詩歌が圧倒的な意味を持った時代はないように思われる。

ポーランド人の誇る、いわゆる「スラヴ世界の最高の詩人」（ちなみに、現在ポーランド国内に存在する偉人の記念碑・記念像の数で一位がポーランド滅亡時最高軍事司令官コンチュウシュコ、二位がミツキューヴィチである。35, 126-127）アダム・ミツキューヴィチを先頭に、多くの優れた詩人や作家が出現したが、これは詩歌に今までにないほどの意義を与えた。ロマン主義詩は哲学と共生し、社会評論活動にも助けられて、事実上人生の価値体系を設定し、世界観を形成し、当時のとりわけ若い世代の姿勢・態度を決定づけたのである。ここにロマン主義の最大の時代的意義があった。

ポーランド・ロマン主義は、フランスの偉大な比較文学者・文化者のジャン・ファールブルが評価したように、「ともするとしばしば忘れられたり知られてはいないが、世界中のロマン主義のうちで、たとえ最も美しいとまでは言えないにしても、少なくとも最も表現に富み、最も気高く、最も完璧なものを自己の内に蔵している」のである（7, 95）。

◆注は煩雑を避けるため、参考文献番号とページ数で、本文中に略記した。

◆主要参考文献

- 1 J. Kleiner, *Studia z zakresu teorii literatury*. Lublin 1961.
- 2 W. Tatarkiewicz, *Romantyzm, czyli rozpacz semantyka*. "Pamiętnik Literacki" 1971.
- 3 I. Chrzanowski, *Optymizm i pesymizm polski*. Warszawa 1971.
- 4 J. Krzyżanowski, *Romantyzm polski*. "Pamiętnik Literacki" 1962.
- 5 J. Krzyżanowski, *Dzieje literatury polskiej*. Warszawa 1979.
- 6 M. Janion, *Światopogląd polskiego romantyzmu*. Warszawa 1965.
- 7 M. Janion, *Gorączka romantyczna*. Warszawa 1975.
- 8 M. Janion, M. Żnigrodzka, *Romantyzm i Historia*. Warszawa 1978.
- 9 A. Walicki, *Filozofia a mesjanizm*. Warszawa 1970.
- 10 A. Walicki, *Millenaryzm i mesjanizm religijny a romantyczny mesjanizm polski*. "Pamiętnik Literacki" 1971.

土谷直人

- 11 A. Walicki(red.), Polska myśl filozoficzna i społeczna. Warszawa 1973.
- 12 M. Straszewska, Romantyzm. Warszawa 1977.
- 13 M. Straszewska, Romantyzm a narodowa edukacja i obyczaje. "Polonistyka" 1969.
- 14 S. Wasylewski, Życie polskie w 19 wieku. Kraków 1962.
- 15 S. Wasylewski, O miłości romantycznej. Kraków 1958.
- 16 J. Starzyński, Romantyzm i narodziny nowoczesności. Warszawa 1972.
- 17 J. Starzyński, O romantycznej syntezie sztuk. Warszawa 1965.
- 18 J. Kulczycka-Saloni, Dziedzictwo romantyzmu w kulturze okresu pozytywizmu. W, "Z polskich studiów slawistycznych.S.4." Warszawa 1972.
- 19 A. Kowalczykowa, Ciemne drogi szaleństwa. Kraków 1978.
- 20 M. Saganiak, Słowackiego mistyczna koncepcja poznania i twórczości. "Pamiętnik Literacki" 1999.
- 21 A. Witkowska, R. Przybylski, Romantyzm.wyd.3. Warszawa 1998.
- 22 Z. Sudolski, Mickiewicz. Opowieść biograficzna. Warszawa 1998.
- 23 Z. Sudolski, Słowacki. Opowieść biograficzna. Warszawa 1996.
- 24 Z. Sudolski, Krasieński. Opowieść biograficzna. Warszawa 1997.
- 25 Z. Jakubowski, Literatura polska. Warszawa 1977.
- 26 W. S. Turczyn, Epoka romantyzmu w Rosji. Moskwa 1981.
- 27 S. Fiszman, Constitution and Reform in 18-th Century Poland. Indiana UP. 1997.
- 28 C. Milosz, The History of Polish Literature. UC UP. 1983.
- 29 平島正郎他 『19世紀の文学・芸術』 青土社 1975。
- 30 A.ミツケヴィチ, 工藤幸雄訳 『パン・タデウシュ』 文芸春秋 1999。
- 31 土谷直人 「ミツケヴィチとルイレーエフ」 東京水産大論集 第16号 1980。
- 32 土谷直人 「ゲルツェンとポーランド亡命者たち」 東海大学文学部紀要44集 1986。
- 33 土谷直人 「ヴィルノ大学の教育改革について」 西スラヴ学論集 第2号 1991。
- 34 土谷直人 「ハイダマキ運動と三つの文学」 西スラヴ学論集 第2号 1991。
- 35 土谷直人 「ポーランドの記念碑・記念像 (訳)」 西スラヴ学論集 第3号 2000。
- 36 土谷直人 「コルディアンの『幕開前』について」 ルシスティカ 第10号 1993。
- 37 土谷直人 「啓蒙の時代」 スラヴィスティカ第11号 1995。
- 38 土谷直人 「父祖の祭 第三部 断章」 『ポーランド文学の贈り物』 恒文社 1990。
- 39 土谷直人 『ポーランド文化史ノート』 新読書社 1985。
- 40 土谷直人 『ポーランド・ギャラリー』 TPC 2000。